

# シスコ野郎と青春フ ラクタル

全力で桜のマネをする金木犀

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

「私達、付き合いましょ。……勿論本気じゃないわ、付き合ってるフリよ、フリ」

一ヶ月前から実妹に「お前」と呼ばれ、邪険に扱われるのに疑問を持って幼馴染に相談して出来上がったのが偽物カップル。だが互いが互いに同じ思いで前を向くとは限らない。

これは実妹、幼馴染との歪な三角関係の物語。

# 目次

|              |  |    |
|--------------|--|----|
| 一点状のフェイクカップル |  | 1  |
| 一直線上のアンステーブル |  | 22 |
| 三角形上のストラグル   |  | 40 |
| 四角形のコンフュージョン |  | 58 |



# 一点状のフエイクカツプル

高校2年生になって1ヶ月が経った。

高校生という思春期最高到達点に立たされた俺の日常は、美少女が空から降ってきてパンツ丸出しで地面にめり込むだとか自転車坂道を駆け下り大いなる海へとフライアウェイするだとか、はたまた転校生の美少女に顔を蹴られて鍵を落とすだとか、そんな青春っぽいことは何も無く淡々とカレンダーはその枚数を減らしていた。つまるところ、これがギャルゲーならばクソゲー評価を免れない程に俺の青春には出会いも事件も過不足気味であった。帰宅部としては正しいのだろうが俺としてはミジンコほども良いから何か刺激チックなイベントが起きてほしいわけで。

だが一つだけ。刺激的と言っても毒のような忌避したい出来事だが、進級してから変わったことがある。ある種最新ニュースだ。

この俺、桂川けいせんしずる静流には一人妹がいる。それこそ思春期真っ盛りな年齢の中学3年生の妹が。妹なんて別にどこの家庭にいたっておかしくないだろ？ と返答が来てしまう予想は付くがまあ待つてほしい。もしこれを友人が聞けば「お前自慢じゃねえか!？」万

年彼女の影がない僕への当てつけですか!? 妹とかおまそれ存在自体が奇跡って分かってて宣わってんですか!? こうやって怨恨を抱く僕を眺めてせせら笑ってる訳ですか!? ぶつ殺すぞああん!」と憤怒して殴り合いになるのだが、その話はさておき。

端的に、俺の妹——桂川優愛菜は、俺のことが嫌いになったかもしれない、と思うのだ。

こう、アイスピックで冰山を登るかのようにザクザクとした言葉で優愛菜は俺を抉ってくる。と言っても分からないかもしれないので、紳士諸君には先日の兄妹会話を見てもらいたい。

「お前、今日は早いんだ」

と、これは俺が高校から帰って来たときにリビングにいた妹の第一声である。

お前、という二人称は当然俺のことで、優愛菜が中学3年になった頃から気付けば呼ばれるようになっていた。それまでは普通にお兄ちゃん呼びだったのが、進級して突然である。心変わりするにもアレだ、超常生物に脳味噌を交換され操られてしまったならまだしも、そんな非科学的現象の起こり得ない現代社会において何故そうなってしまうのかは非常に気になる点である。

それにこの間まで懐いていた妹から拒絶されるのは兄貴としては辛い。会話を拒絶

され続けたら精神が殺られて精神科入院コースになること請け合いなので、なるべくダメージを受けないようしよぼくれて立ち去る他ないのだった。自分でも兄貴としての立場が弱いなと思う。うん、すっげー弱い。心も弱い。妹に言葉で負ける兄貴って何よ、つて話。

ついでに、兄貴に「お前」呼びとか世間的にも普通じゃない訳で。両親の前なら良いが親戚の前で言われてみる、絶対に俺が妹に何かして嫌われたと思われるだろうが。特にああいう親戚輩一同の、特に性格の悪い一部は過激な噂話をでっち上げがちだ。「桂川さんの長男、妹さんのブラで女装してたのを見られて妹さんに嫌われちゃったらしいんですよ」とか叔母様会議でヒソヒソ言われてみる、事実無根であつても俺は死ぬ。サイコロを振つて1〜6が出る確率で死ぬ。急性の突然死、死因は社会的恥辱による心停止。つてな訳で優愛菜、お前呼びはやめろ。せめて呼ぶなら「お兄ちゃん」とか、それが嫌なら「お兄」とか「兄さん」とか「にーにー」。「兄たま」も悪くない……つてそうじゃないな。

願望は心の床下に隠しつつ、気になるのはやはり優愛菜のことだ。

中学3年生になるまでの優愛菜はそれはもう素直に可愛かった。何も不純物の含まれていない精製水みたいで、天使だとも思つた。中学の時運動会に応援に来て「お兄ちゃん頑張つて！」と笑顔を咲かせた優愛菜とかシスコンじゃないがマジモンの天使だ

と思っただけである。キリスト教も三位一体に出てくる精霊は優愛菜だと認めるレベル。なのに今では俺に対しては日常的に罵詈雑言が飛ぶし、とても邪険に扱ってくる。スケバン宜しく、ヤンキーチックな少女に生まれ変わってしまったのだ。がんがらがっしやん、俺の心は壊れた。

「早く出てっつてくれない？ お前がいるとドラマに集中出来ないから」

そんな事を考えてるとは露ほども知らないであろう我が妹は、ソファアールでだらし無く寝っ転がりながらテレビを見ている。Tシャツが捲れてへそと共に白い健康なお腹が見えていて、と思うと何気ない動作でサツと服を摘んで元に戻した。俺が見てるのに気づいて戻すのやめなさいもう！ とオカンのように説教したいが、した瞬間舌打ちが飛ぶので辞める。聞落ちした天使は兄貴でも怖いのだ。

俺は部屋に行こうとして、足を止める

そういや親父もお袋も今日仕事で帰ってこない、ということを伝えなきゃならない。

「……なあ優愛菜。今日晩ごはんどうする？」

「なんで？」

「今日帰ってこないって言ってたぞ」

「そなんだ。じゃあお前が適当に惣菜買つといて。私はご飯炊いて味噌汁作るから」

そう言うのと再びリモコンの一時停止ボタンを押して、ドラマを見始める。

両親共々バリバリの社会人で有る我が家はこういう状況も珍しくない。だから俺も優愛菜も手慣れたもので、この役割分担もいつものパターン。

最初の頃は「お兄ちゃん！一緒に作る！」とか言ってくれたのになあ……すつかり資本主義的分業に慣れちゃって。大丈夫だぞ優愛菜、資本主義の犬から救ってやるからな。

昔を懐かしめば懐かしむほど、取り戻したくなる。優愛菜がこうなつて1ヶ月、未だに俺は慣れないのだ。輝かしいあの日々が懐かしくて堪らない。シスコンとか謂れなき誹謗中傷を受けても良い、何せそれくらいには追い詰められている。

直接優愛菜に聞いても「別に良いですよ、私の勝手じゃん」とかりターンエースしてくるし、ホントに打つ手が無い。元の優愛菜に戻ってほしいけど長年連れ添った俺もどうすればいいか分からない状況で。

---

「と、言うわけで御厨<sup>みくり</sup>。どうすれば良いと思う？ 簡潔に意見を述べたまえ」

「なるほど、それで僕にコメントを求める訳ね。一言でいってやろう。死ぬ。滝壺に落ちてグチャグチャにミキサーされて死ぬ。酷たらしく無残に死ぬ」

「真面目に聞いてるんだ俺は」

中学以来の親友である絹久御厨きぬひさみくりに相談してみれば、雪崩のような罵詈雑言が返ってきた。妹がいないことを妬むのいいが俺に当たらないでほしい。フレンドリーファイヤは現実でもゲームでも御法度だぞ？ 加えてお前に妹がいないのはお前自身の努力不足であつて、御厨がもつと両親に働きかけていれば妹が生まれていた可能性はあつただ。知らんけど。

「あのおな、唯一の兄妹である妹から冷たく対応されるのって結構しんどいんだぞ？ しかもこないだまで普通だったのが、唐突にだな」

「馬鹿野郎！ 冷やし妹とか天然記念物ですからね!! そのダイヤにも匹敵する希少性が分からないとか僕が拳で分かせてやろうか!」

「いやなんで拳？ なんで肉体言語なんだ？ 気が早くないか？」  
「妹に決まつてんだろ！」

何が妹なの？ 何が決まつてんの？

駄目だこいつ、正常な会話が出来ない。変な薬でも飲んだか？ 流石に友人といえ違法薬物を摂取しているならば警察に引き渡すのも吝かじゃない。幻覚とか見始めたら

ガチで110番に電話する他ないだろう。

しかし、遺憾ながらこんな馬鹿茄子だろうと腐っても友人。頭が壊れていても直せるなら直したいとちよつとは思う。1ナノメートルくらいは。何せ都合の良い肉盾になれる才能を秘めてるのだ、教師に怒られたときにスケープゴートにできる人材なぞ彼以外にほぼ類を見ない。

それはそれとして、一つ物申したい。

「あのな御厨。分かかってないなら教えてやる。時代は妹じゃない、姉だ」

「はあ？ あんな年増の何が良いんだよお前。可愛さが無いし上から目線だし、良いところ一個もないぜ？」

「お前本当に分からないやつだな。姉の尊さ、そしてエロスを。分からない？ 殺すぞ？」

「いいねー、妹がいる奴は訳分からん生物に好意を抱く余裕があつて！ なーにが姉じゃ、時代は妹！ 純真無垢妹ヤンキー妹ギャル妹オタク妹サド妹マゾ妹メンヘラ妹ヤンデレ妹文系妹理系妹体育会系妹ニート妹メイド妹OL妹看護婦妹教員妹ゾンビ妹ケモミミ妹、全部あり寄りのありなんだよー」

「相変わらずその熱意キモいつつの。そもそもだな、妹いないのにシスコンカッコいもうとカッコとヒ（妹）とか頭可笑しいんじゃないか？」

「お前こそ姉いない癖にシスコンカッコあねカッコとじ（姉）とか狂ってるよ！あゝ 殺意で頭が殺られそう、てか殺りそうなくらい煮えたぎってる！」

「お、やるのか？ 万年帰宅部のお前がそんな貧弱な拳でやるのか？」

「お前も帰宅部だろうが！ やってやんよ！ マジのガチで真剣にやってやんよ！」

と、拳を互いに構える。そして目を合わせて数秒、互いに溜息について構えを解いた。虚しい。とてもとても虚しい。

譲らない一線があるとはいえ、その為に喧嘩するとか馬鹿らしい。なんだってコイツを殴り倒したところで俺に姉が出来る訳がない。ファイトマネーは教師の説教だ、今月もう一度経験してるため次食らったらレッドカード。期間限定特典は反省文10枚である。ふっ、命拾いしたなシスコンが。

御厨も同じことを思ったのだろう。拳を引つ込めれば脱力したように椅子に座る。考え直してみると、そもそもこの言い争い、不平等なのでは？ 御厨はまだ両親が夫婦の営みさえすれば妹が出来る可能性のあるのに対し、俺に姉が出来る可能性は皆無。時間の壁は厚い。タイムマシンを作るか勉強机からドラちゃんが出てこない限り俺に姉は出来ないのだ……そう思うと好き勝手言ってくるこのクソ友人をぶちのめしたくなるが、お前の姉の顔に免じて我慢してやろう。

「それで、なんだったか？ 妹と仲が悪くなったとかグレたとか、そういう話だったっけ

「？」

「ああ。無茶苦茶困ってる」

「そうだな……一応優愛菜ちゃんのことを知ってる僕からすると不思議なくらいなんだけど」

と、首をひねった。

高校一年からの友人である御厨は我が家に何度か遊びに来ており、その時に優愛菜とも会っている。最近は来てないが、来ていた当時の優愛菜はまだ天使だったから想像付かないのだろう。安心しろ。俺も未だに想像付かん。

「正直優愛菜ちゃんがグレるとこ思いつかないんだけど……本当にそれグレたのか？  
ちゃんと確認したのか？」

「確認してもだな。実際俺は優愛菜とは話してるわけだし」

「や、違う。一度ちゃんとそのグレたことについて、コミュニケーションを取ったことあるのか？って話を僕はしてるんだ」

「……そう言われると、無いとしか言えない。優愛菜からマジうぜえとか、失せろとか、嫌いとか言われたら死にたくなるのだ。ちよつとした感じで聞いたことはあっても、きつちりと話すことは意識的に避けてきた。

考えていると「で、どうなんだ」と御厨は更に急かすように言葉を重ねる。

「……無い。無いな」

「じゃあ僕の答えはシンプルだよ。ちやつちやか優愛菜ちゃんと話せ。それで前に進むか後ろに戻るかは結果が出るまで分からないけど、進展する事だけは保証するよ」

御厨に諭されて、俺は決意した。かの暴虐な妹と剣を持たず対話すると。

放課後、帰ろうとした俺に「静流」と名前を呼んでくる声が背後から伸しかかった。

「今日は一人なのね、このぼっち」

「ぼっちじゃない。俺は友達いるからな」

「友達っていうのは私とあと絹久君の事でしょ？ 粹がない粹がない」

んだよこいつ……と思いつつながら振り返れば、予想通りの人物が立っていた。

みずな しゅうり  
水梨遊璃。俺の無二無三の幼馴染だ。

茶色の長い髪はシルクのカーテンの如くゆらりと腰まで広がり、目鼻口は職人が取って付けたみたいで、白い肌も相まって顔立ちはさながら高価な人形。スラリとした腰つ

きに細くも肥えた太腿、噂では新しいクラスメイトからもう3回告られたとか。だからまあ。癪だが、いつ見ても美人だと思ってしまうのはしょうがないことなのだろう。

「なんかこうして会うの久々だな」

「そりやそうよ。私は暇じゃないんだから」

大きな胸を張って、遊璃はカバンを肩に掛け直した。事実、遊璃はモデル並みの身長を活かしてバレエ部のエースをやっているからその通りだ。だと言っても俺が暇みたいに言うのは止めてほしい。……あまり否定出来ないけど。

昇降口を過ぎて、横に並んで外へと出る。グラウンドは体育会系の生徒が部活動に勤しむ姿で埋まっている。

「今日は部活休みなのか?」

手持ち無沙汰になったので取り敢えず話題を振ってみると、遊璃は肩を落として言う。

「まあそんな感じ。男子バレエ部の馬鹿が集団で女子更衣室の覗きをやってたのよ、それで一週間休部」

「今時やる奴なんているんだな」

もはや漫画とかでしか見ないだろ覗きって。ネットで検索すりやそういう画像だつて山のようにあるだろうに……リアルで目にしたいという謎の熱意すら感じる。分か

るが分かりたくない。この微妙な男心を理解してくれる彼女募集中だ。じゃんじゃん投稿フォーマットに送ってくれ。

俺の感心半分の言葉に、遊璃は心底興味なさそうに「らしいわね」と吐き捨てた。

「でもどうでも良いわ。ただ今の時期は本当に勘弁して欲しいのよね、全く。私達は関係ないのに巻き込まれた感じだし、大会前に停部とか……。考えだけで腹が煮えたぎってくるわ」

「まあ落ち着けて。遊璃は見られてないんだろ？」

「当然じゃない。あんなクズ達に見せる身体なんて無いわよ」

「……こりや当分続くな」

遊璃の綺麗な仏頂面を眺めながら、思わず呟く。

ここまで馬鹿とかクズとか罵倒を連呼する遊璃はレアだ。宝くじで4等が当たるとらいレアだ、と表現すると少し多すぎる気もするが実際は一年に一回もここまで苛立つ遊璃はお目にできない。それほど今回の事件にムカついているのだろう。いや、それは季節によって木々の葉が変化するくらい当たり前の出来事だ。自分の知らないところで起こされた事件で被害を被ってるんだから、腹立って立つだろう。それにしても、美人が怒ると怖いというのは本当で、無表情なのに威圧感から距離を取りたくなくなる。「まあ遊璃は覗かれてないんだろ？　ならまあ、部活はともかく個人的感情としては一

巨鎗を収めても良いんじゃないか？」

「そんな訳にはいかないわ。何せ奴らは覗き対象に優先度を付けていたらしくて、私の身体は第一位だったらしいの。腹立たしいことにね。怒るくらいで済むなら感謝して欲しいくらいよ。もし私まで覗かれていたならまず警察沙汰にするわ。絶対に逃さない。司法の手で地獄の深淵まで追いかける」

「え、めっちゃこわ」

目が語っていた。ガチだ。この女、やると言ったら絶対にやる。良かったな覗き魔共、こいつの着替えは覗かなくて。きつと問題を大きく焚き付けてSNSとかにも匿名拡散しまくって社会的に抹殺されてたぞ。

校門を出て、駅の方面へと歩く。幼馴染というのもあって遊璃の家は俺の家のすぐ近く、歩いて2分くらいの位置にある。昔は良く遊びに行ったものだが、如何せん高校に上がってからは忙しくて遊ぶことすらしない。高校2年となってからはクラスも違うから、精々今日みたいに登下校を共にするくらいだ。

それで疎遠になったかと言えばそういう訳でもないが、それでも互いの距離感は少し遠くなったのは間違いない。

そんな事はどうでもいいけど、と遊璃は口にする。

「最近、優愛菜はどう？ 今年受験だったかしら、元気にしてる？」

「ああ……まあな」

「何か含みのある誤魔化し方ね。吐きなさい。キリキリ吐きなさい」

最近の優愛菜のことを思い出して、胃がキリキリしてきたので曖昧に返事をする直ぐに嘔み付いてきた。流石幼馴染、俺の胃腸の変調に鋭い。俺の家に健康診断機として就職してくれたら毎日元気に生活できるだろう。そして不摂生があれば無茶苦茶罵られると……マゾでは無いからノーセンキュー。

さておき、エロ本でも無いからして隠すようなことでもない。要点だけ摘んで話す。

「それがな。優愛菜が中学3年上がったから、俺のことを嫌いになったみたいなんだ」「え、あく。なにそれ。新手の冗談？ 分からないんだけど、ちゃんと説明してくれない？」

「そうか、遊璃は今年に入って優愛菜に会ってないもんな」

「メールに、週1で電話はしてたわ。進級してからは受験で忙しいと思っしてないけど」

何それ、仲睦まじすぎでは？ 俺とより話してるぞそれ。

「それでどうしたのよ。静流のことを嫌うなんてあるのかしら、あの子が」

「それがあるんだよなあ。最近家に湧いたゴキブリみたく邪険に扱ってくるんだよなあ。同じ空間にいるだけでも早く出てけとせかせかせかわれ、一緒に夕飯食つてもすぐ食つて

自分の部屋戻る、まるで反抗期の猫でも相手にしてる気分だ。話す機会とかもこの一ヶ月全くない」

「なるほどね」

そう言うのと遊璃は納得するように頷いて、それから俺の手を掴んだ。

「どうしたんだ？」

「静流、一つ。対シヨック療法になるけど方法があるわ」

「構わないけど……何をするんだ？」

「私達、付き合いますよ」

瞬間、時は止まる。当然そんなのは比喩だ。俺がそう感じただけで腕時計の長針は目に見えて回っているし、春終わりの湿った風は肌を打ち付ける。

でもそう思わないとやってられない。

付き合いますよ？ 誰と？

その結論は誰よりも理解できているはずなのに、情報が処理し切れずフリーズした。漸く再起動した脳味噌で、俺は口を衝く。

「……え？ 付き合う？」

自分でも間拔けな声が出た。自己弁護するわけじゃないけど、当然と思う。

漸くマトモに回るようになった脳味噌だったが、未だ分からない。会話の脈略的に、

どこがどうなってるそう転じるのか。全然分らない。本気で言ってる訳じゃないことくらいは分かるが——と、遊璃は微笑んで言う。

「勿論、本気じゃないわ。フリよ、フリ。恋愛漫画とかでよくあるじゃない。付き合ってるフリをするのよ」

「付き合ってるフリ……？ 今時古風な。する必要なんてあるのか？」

「あるわ。優愛菜だってそんな事を言われれば反応が変わるはずよ。付き合つてると言つたとき、どう言葉を返してくるのを見なさい。ふーん、くらいで終わるようなら無関心つてことだし、逆に興味津々に来るなら静流のことが嫌いじゃないつてことになるわ」

言われれば、最適な方法のように思えてきた。

御厨の言うコミュニケーションよりもこっちの方がやりやすいし、優愛菜の本心も引き出しやすい気もする。やる価値はあるのかもしれない。

「あくそうだな」

「煮え切らない返事ね」

「だってなあ……」

抽象的な、言葉にならない声が出るとは風に流され雲散無消してを繰り返す。

だって、それって嘘カップルつてことだろ？ もしバレたら面倒だ。相手は学年でも

異性人気の高い遊璃で、それに相手が出来たとなったら大騒ぎするに決まってる。俺だって問い詰めはしないが絶対に相手について聴取するだろう、10年以上も幼馴染なんだしな。半端なやつと付き合わせる気はない、それでも覚悟があるなら俺の死体を超えて行け。

「言つとくけど広める気は無いわよ？　あくまで優愛菜ちゃんにだけ言うだけ、学内に広めようとかは考えてないから」

「それなら大丈夫……なのか？」

フリとは言え、付き合う訳で。それがどう影響するのかなんて万年恋愛初心者の俺に解るべくもなく、ただ無知故の不安な声が出るのみだった。

「大丈夫よ。私も全面協力する、フリって言うのは二人の秘密にすれば。ね？」

「まあ、ああ、うん。ならやってみるのも悪くないな」

「決まりね。じゃあ早速手を繋ぎましょ」

「手ね」

ほい、と投げ出す反面に俺の心は真昼のサハラ砂漠のように火照っていた。もし俺の心臓がマントルなら今頃血圧で噴火して日本の地図を変えていたことだろう、その点は全人類俺に感謝して欲しいものだ。

「お、おい」

「何？ 恋人でしょ？」

遊璃は俺の手を掴むと、指をするりと絡めた。

恋人繋ぎ。脳内辞書でしか知らない言葉に脳がパンクしそうになりつつも、何とか持ち直す。というか持ち直せ、俺。ここで弱いところを見せてみる、今後永遠にネタにされるぞ。な？ 俺なら踏ん張れる、でも遊璃の指スベスベしてて暖かいな……じゃない踏ん張れよ俺！

幸いと言うべきか、前を向いて歩く遊璃は一切合切俺の様子など鑑みてなかったようで、少しホツとするような残念なような気分になる。ここで残念とか思っちゃうところが俺の弱い心なんだろうな。だが男子高校生である以上仕方ないことではある、と自己正当化だけはしておこう。

「なあ。恋人のフリをするのは良い、だがいつまでやるつもりなんだ？ 地球が終わるまで、とかありきたりな恋愛漫画的発言をカマすつもりが無いなら決めとこうぜ」

「それでも良いわよ……冗談よ。冗談だから手を解こうとしないでくれる？ 鬱陶しい」

うるせ！ 恋愛はしたいが俺はまだ人生の墓場には入りたくないんだよ！

違うとのことなので、渋々抵抗を止める。

「真面目に言えよな。冗談でも本気にするタイプだぞ俺は」

「一番社会で厄介なタイプねそれ」

それも確かに。ジョークに嘸み付きまくってネットで炎上してそうだ。

少し考え込むように遊璃は握っていない方の手を顎に当てると、すぐに思いついたのか口を開く。

「そうね。何なら今日明日だけでも良いけど……どうする？」

「どうする、と言われてもだな」

「少なくとも優愛ちゃんを揺さぶるのが目的なら長期間やる必要はないのよね」

「なら今日明日だけってことか？」

「そうね。いや、やっぱり一ヶ月くらい続けるわよ」

「はあ？ 一ヶ月？」

突然言葉を翻した遊璃に聞き返す。

伸ばすにしても一週間とかならまだ分かる。遊璃の部活が再開するのもその頃で、丁度いい頃合いだからな。だが一ヶ月となるとそれはもう、下手をすればフリであるのがバレるリスクだつてある。それで困るのは俺じゃなく遊璃じゃないだろうか？

「ええ、そう。一ヶ月。良いじゃない、そのくらい気合を入れて聞いて来なさいよ」

「まあ、お前がいいんなら何も言わんが」

どうせこの一ヶ月の間で俺に彼女が出来るわけでもあるまいし、結局は世界のカップ

ル数が一組増えるだけだ。それなら何も問題は無い。

「じゃあ決まり。デートもしましょう」

「え、そこまでやるのか」

「当たり前でしょ。些細なことからぼろぼろと漏れてバレルものよこういうのは」

それは恋愛漫画の見過ぎでは？ とか思ってしまうが、隠し事をする以上穴は無くしたいという点に関しては同意だ。リスクヘッジと思えば、妥当な判断だと納得できる。にしてもそこまでやったら本気で遊離に惚れそうで怖い。嘘が本当に流転する展開とかそれこそ恋愛漫画で山ほどある訳で、俺自身この容姿端麗な幼馴染に惚れ込む可能性が無きにしてもあらず。もし幼馴染とかじゃなかったら速攻で告白して振られてる。撃沈族の仲間入りである、笑えねえ。

「そういうわけだから、次の日曜日開けといて。デートよデート」

「分かった分かった、んでどこ行くんだ？」

「適当よ。所詮はフリだもの」

「そんな雑な」

まあ後でメールするから、と言うに留まった。完全に昔一緒に遊びに行ってた頃と何も変わらないんだよなこれ。

そんなこんなで、それからは何も関係ない話題を駄弁りながら自宅付近で別れたのが

十分前。

今思えば間違いだった。遊璃も連れてくるべきだったのだ。  
頭をガシガシ搔きながら俺は盛大に顔を擧める。

——ああ、やっちゃまった、と。

## 一直線上のアンステーブル

我が家は玄関を超えれば、まず廊下が飛び込んでくる。廊下と言ってもそう長いものでもない、ウサイン・ボルトならば0.5秒で駆け抜けるくらいの距離しかないのである。それでも我が家で一番長い細道という意味で、そこは廊下だった。

そこから進んで正面のドアを開ければキッチン一体型のリビングがお出迎えだ。リビングだけはそこそこ広く、確か2.5畳とかそのくらいはあったはずだ。

そしてリビングのソファアーに一人。元エンジェル現不肖の妹である優愛菜が相変わらずダラダラと仰向けに寝ながらファッション雑誌を読んでいた。既に制服からは脱皮していて、短パン半袖のラフな格好。

優愛菜は物音で気付いたのか、こちらに視線を投げかけるとすぐに目を逸らした。

「お前か。帰ってたんなら一言くらい言つて。気付かないじゃん」

「そうか。すまん」

「分かったならもう行つてよ。私、忙しいから」

どこがどう忙しいんですかね……と心の中でボヤク俺を責める人間はきつとこの世界にはいないに違いない。雑誌読んでもだけの人間が忙しかったら一日中家から出な

いニートだって忙しいだろう。俺だって今遊璃と付き合うのに忙しいし？ いやまあフリなわけだが。

そうそう、そうだ。忘れてた訳じゃないが、遊璃と付き合ってる旨を話さなきゃならない。

「あー、その。優愛菜。お前が無茶苦茶忙しいのは分かったから今ちよつと時間あるか？」

「バカにしてんの？」

「ちげえよ。必死にアポイントメント取ろうとしてるってことを分かってくれませんかね」

「その話し方キモいから本当に止めて」

優愛菜は雑誌から目を離さずに淡々と口にした。キモいとか、少し俺に厳しすぎやしないかそれは。優愛菜は俺をどうしたいの？ サナトリウム送りにしたいわけ？ 別に良いけど俺も抵抗するからな？ もちろん拳で。こういうところがキモいって言われるんだろうな、辛いね男（オタク）は。

凹んでいると「で、何？」とぶつきらぼうに聞いてきた。良く分からないがなんか話しても良いらしいっぽい。

「遊璃のことは覚えてるよな？」

「当たり前でしょ。この前まで良く遊んでたわけだし、お前より話してて面白いし」

いやだからさり気ない会話の中に毒を仕込むの止めて欲しいんだよな。自殺念慮とか抱えたらどうするんだ、一定ボーダー越したら富士樹海に失踪するからな？ 行き先宣言して失踪とは如何に。

一層悲しくなってきたが、やりきれなさを嘔み殺してリビングにある椅子に座る。

「で、だ。俺、あいつと付き合うことになったから」

と、区切って優愛菜の反応を伺う。俺の仮説はこうだ。俺と幼馴染である遊璃は幼稚園時代からこの家に遊びに来ており、優愛菜も幼い頃から見知っていて。遊璃もそんな純真無垢（当時は、だが）な優愛菜を気に入っていた。遊璃は身内には甘いところがあるから、色々世話を焼いたり遊んだりして、下手したら俺よりも慕っていた。それはもう実の姉のようにだ。だから恐らく、遊璃が取られたと感じて優愛菜は怒るだろう。それから殺すような視線で睨んで「ホンつとあり得ないから。お前。死ねば良いのに」とか言つてきそう。うん。あり得る。昔ならいざ知らず、今の優愛菜ならあり得るからこそ目茶苦茶死にたくなる。はあ、付き合うフリとかしなきゃ良かったな。

去来した後悔に静かに溜息をつきつつ、優愛菜の動きを待つ。

優愛菜は顔を伏せながら、何も言わない。怒っているかと思つたが、どうも様子がおかしい。今の優愛菜は、怒つたならばもつと感情的に火災用スプリンクラー宜しく辺り

一帯に毒を撒き散らすはずなのだ。

「お、お前……………」

暫くして、ガスが漏出するみたいな掠れ声が優愛菜の口から溢れる。一定のリズムの掠れ声。その色には悲壮感が籠もっていて、俺は言葉を失う。失うしかない。

全く予想も付かなかったことに、優愛菜は泣いていたのだ。華厳の滝のような激しさはなく、しかし潤った綺麗な眼から一筋の解れた糸みたいにツーンと垂れ、雫はソファーにぼつりぼつりと落ちる。

こういう時こそ冷静に、冷静に考えるべきだ。罵詈雑言でも無ければ激情でも無く、涙。その意味を考えろ。

侮辱も、厳しい言葉も、何一つ掛けていないつもりだ。ただ付き合うと言っただけ。

単純に考えれば姉代わりとも言える遊璃が取られたから…………とも取れる。だがそれで涙を流すだろうか？ 違和感がある。違和感しかない。仮に俺に兄貴か姉貴がいて、それが知り合いと付き合ったら泣くだろうか。兄貴だったなら絶対に泣かないな、むしろ家族の系譜を残さなくてはならないという重責から開放されて清々して送り出せる。姉貴なら相手を一発殴って終わり、俺は慈悲深いのである。

なら、もしかすると。俺は優愛菜の遊璃への思いを過小評価していたのかもしれない。

何せ同性だ。年齢だって3つ離れてる。長年の付き合いだ。

だがいくら否定要素を謔言のように反芻しても、結論は同じ到達点に行き着く。……優愛菜は、遊璃のことが恋愛対象として好きなのかもしれない、と。

ここで「付き合つてるとか嘘だから。騙してごめん」と本当のことを明らかにするのは簡単だ。でも今それをするのは違う。部分点すら貰えない完全な誤答でしかない。遊璃と何を約束した？ なんの為にこんな低俗な嘘まで吐いて、最悪な気分になった？

遊璃の本当の心を、悩みを、明白にするためだ。

「なあ、優愛菜。遊璃と出会った時のことを覚えてるか？」

「……聞きたくない」

「俺と遊璃は9歳、優愛菜は6歳の頃だったな」

「聞きたくないって」

「あの時は俺に妹がいる事を知った遊璃が優愛菜に会ってみたい、って言ったから初めて対面したんだよな。それまでお前、遊璃が来るたび部屋に籠もってたからな。でもこんなに仲良くなるなんて俺も想像付かなかった、まあ人間関係なんて流転するしなとか頭ん中空にして適当に生きてみて、気づきや9年か？俺に関しては10年オーバード、腐れ縁って言葉が相応しいだろうな」

「止めてよ!!私にその話をしないで!!」

バサツ、と優愛菜がフアツション雑誌をカーペットに投げ捨てる音。涙を拭いながら、赤く充血した眼光が空気を穿つ。

「お兄ちゃんは！　何でそう無頓着なの！」

「……俺は最大限、優愛菜に寄り添ってたつもりだ」

「寄り添ってるよ！　だから私が抱えきれずに困るんじゃない……！」

ヒステリックに叫ぶと、顔を赤くした優愛菜は立ち上がって、双眸を指で抑えながらリビングを出ていく。バタンと扉の閉まる音が嫌にこの広々としたリビングに響き渡った。

感情の坩堝が渦巻いたままのリビングに、俺は溜息を切った。

何が悪かったのかなんて、明確に分かっていた。

現状を打破するために、好転させるために、偽りの話をするだなんて何処かの宗教の公明正大な神様が許してくれなかったのだろう。だからといって更に冷戦を悪化させるなんて過酷な仕打ちをしやがって。決めた、俺は一生何があっても無宗教だ。妹との縁を斬るような神なんざ地獄に落ちた方がマシだ今畜生が。

思えば、本当に優愛菜が遊璃の事を好きかどうかとも分かっちゃいない。あの時は焦っていたが、終わってみれば早とちりだった気がしなくないのだ。それを聞くにしても優愛菜は今日はまだ話してはくれないだろうな。結局泣いた理由すら分からず、ああ。俺

は駄目な兄貴だったよ。

自己嫌悪の海に沈みながら、ふと思いつくように俺はスマートフォンを懐から取り出す。電話をかける相手は当然、遊璃だ。

『静流？ どうだったの』

「失敗した。毛沢東と蒋介石が手繋いでデイズニーランドに行くくらい難しい状況になっちまったよ、たく」

『それこそ夢のような話ね。まあそんなつまらない喻えをするくらいなら大丈夫そうかな。なら今から来れるでしょ。いつものファミレス集合』

「はあ？ つてもう切りやがって」

仕方ない。仕方ないが、お呼びとあれば恋人として行かなきゃならないのだろう。

俺は重い腰を持ち上げて、制服のまま外へ出ることにした。

家から3分ほどのファミレス。そこは高校に入学してから、テスト期間の度に遊璃と

勉強している馴染みの場所である。

ウェイターに待ち合わせと言って探してみると、遊璃は窓際の四人席を確保していた。既に制服では無く、淡い紅色のワンピースを着用している。

「よう。一時間ぶりだな」

「ええ。それより失敗したって言ったわよね。もつと具体的に教えてくれる？ 私には

その権利があるはずよ」

「んな急かされなくても教えるから、まず注文させろ」

「それはそうね」

互いにメニュー表を手繰り寄せる。試験勉強の場代としていつもなら高めに注文するのだが、今日は長居するわけでもなし。安めで良いだろう。

俺はドリンクバーとバナナアイス、遊璃はドリンクバーとショートケーキを頼んで席を立つ。

「で、優愛菜の態度が変わった理由は分かったの？」

「分からん。てか聞く前に泣かれちまったから何も分からん」

「あくなるほどね」

ドリンクバーでコーラを注ぎながら答える。遊璃の口ぶりはまるで何かを知ってるような気がするが、つてメロンソーダと山ぶどうソーダとジンジャエールの3つを混ぜ

て美味しいのか？　いつもの事ながらコイツのミックス癖は理解出来ないな。普通に悪趣味だと思う。ドリンクバー初心者の中学生かよ。

「なんか知ってるのか？」

「知ってるってほどじゃないわ。ただ、優愛菜ちゃんならそうなくても不思議じゃなかったなあって反省してるのよ」

「何だそれは。まるで泣いてしまった理由を知ってるみたいで気味悪いんだが」

「知ってるわよ？」

「はあ？」

素で疑問の声を上げてしまった。おいおい、知ってんならさっさと教えてくれ。兄妹仲が永遠に氷河期になっちゃったらどうするつもりだ。

遊璃はそれを無視して席へと戻ろうとする。

「しかし、それはね静流。アンタが自分で気付かなきゃならないと私は思ってる」

赤色の安つばいハリをしたソファアーに腰を乗せて、遊璃は言った。

「いやな、何故なんだ？　この状況を解決するため、優愛菜との関係を戻すためにその解は必要不可欠だ」

「その優愛菜の抱える問題の渦中にあんたもいるのよ。だから教えられない」

「何だよそれ……」

「どういう事なんだ？ 全く持って理解出来ん、何で俺が渦中にいるって？ むしろ渦中にいるのは遊璃、お前だろ。」

「反駁しようとするが、出かけた言葉は遊璃の真剣な眼差しによつて喉元へと押し戻される。」

「静流、あんたが自覚するまで私は答えは教えないし、この偽りの交際関係もやめないわよ」

「何だって？ あのな遊璃、さつきからお前の言ってることがさっぱり分からないんだが……！」

「必要なことよ。全部、全部ね」

ストローでジュースを飲み込む遊璃の全身を、危険物を持ってないか確認する空港職員みたいに舐め回すが、当然つちや当然のことながらその行為は無駄だった。

胸に溜めた猜疑心と一緒に溜息を蹴り出す。

「わーった、わーったよ。それで現状が今より良くなるんなら、そうする。信用するよ。それで良いか？」

「ええ。勿論」

「それで。具体的にこの先の展望とか何かあるのか？」

コーラの入ったガラスを持って俺は疑問を投げ掛けた。カランと氷が崩れる音が響

く。

「当然じゃない。私、そんな馬鹿に見える？」

「スイマセンでした遊璃先生」

「宜しい静流くん」

うむ、と満足げに頷く。余談だが俺が平々凡々な成績なのに対しコイツは定期試験で1位2位を争う優等生。おかげでテスト前はちよどここのファミレスで勉強を見てもらってるわけで、頭が上がらないのだ。

自信满满そうな口調で遊璃は言う。

「取り敢えず、日を空けて私が優愛菜ちゃんと話してみるわ」

「……それ、ノープランってことでは」

「違うわよ失礼な。あんたが分かってない、優愛菜ちゃんが泣いた理由を私は知ってるのよっ。」

「は、はあ……」

その理由、知ってたらどうにかなるほど大きな事情なのだろうか……？ 知らない俺が言えることでは無いが。

「まあ、任せなさいよ。そういう訳で土曜日に優愛菜ちゃん借りるから」

「借りるって別に俺の所有物でも何でもないけどな」

不安は不安だ。だが遊璃なら上手くやってくれると長年の付き合いからなる俺の勘は言っていた。感情を律して常に物事を俯瞰できる遊璃はこういう人間関係の問題を収めるのが上手い、昔も兄妹喧嘩をしたとき仲裁してくれた。

だからまあ、何というか。今回も頼ろうかと思ってしまったのだった。

翌朝の、HR前の気怠い時間のことだ。

今日も6時間目までフルにあるという憂鬱感に身を投じながら、俺の額はセメダインで固まっちゃったのかと勘違いしそうなほど強く机と密着していた。ただ鬱なだけである。授業前のこんな倦怠感はずっと全世界共通で学生特有のものなのだろうが、まあ怠いものは怠い。「今が積み重なって未来があるですよ、だから今この一瞬一瞬を大切に」とか言う校長の話を思い出してみたりもするが、良く考えてほしい。前提としてどのように時間を過ごしたとしても未来は絶対に現在になる。未来が絶対に存在するのなら、この瞬間くらい怠けてても許されるはずだ。俺が頑張らないことで滅びる世界

などラノベ主人公でもなければ存在しないし、滅びる時は地球温暖化か核戦争、それか隕石と衝突する時と相場が決まっている。決まってるよな？ SF映画で世界滅亡系は粗方履修したから間違いはないはずだ。

横目でキヨロリと窓を覗けば、俺の気持ちに呼応するようにパラパラと雨が降っている。五月雨というやつらしい、言葉にすれば大層なもんで今にも格好い必殺技が出てきそうなものだが、生憎現実に天から出てくるのは水のみ。窓から流れ込むしつとりとした湿潤な空気が気持ち悪いつたらありやしない。おかげで更にテンションが下がるわけで。もし本当に俺の気分と天気が直結していたら未曾有のデフレスパイラルに陥るところだったな、危ない危ない。また世界を救っちゃまった、か……。

「いるー！ おい静流!! どういう事だよお前!？」

鬱々しくも静寂な時間はどうやら終了らしい。

朝からデカイ声を響かせる御厨に、仕方なく、ホントくに仕方なく起き上がる。

「なんだ御厨。騒々しいぞ」

「うるせえ！ んなこた今良いんだよ！ お前、水無ちゃんとか付き合ってたってマジか!？」

「……………は？」

俺の思考が一瞬止まる。どこだ？ どこからその情報が漏れ出した？ しかもよりによってこんな歩く拡声器みたいな音量のバカに。

「しらを切ろうとしても無駄だぞ！ 優愛菜ちゃんからネタは上がってんだ！」

「アイツかよ……………」

「昨晚僕に相談したきたんだよ。愚兄が幼馴染と付き合い始めてどうすれば良いか分からないってな！」

息巻くバカに俺は愕然として頭を抱える。もしかしなくともコイツにメールしやがったな……………！ 他にもつといただろ！ 相談相手……………!!

にしても厄介な状況になった。御厨はどうでも良いが、学校でこの噂が広まれば完全に俺と遊璃は勘違いされる。何とかせねばとも思うが、もう手遅れじゃないか？ という疑問も合わさって俺の重い腰は鉛のように動かない。

「僕はお前には失望したよ！ 失望の望だよ！ 妹を困らせるとか世界憲章を反故にしてるからな！ 親権寄せやコラ、僕が優愛菜ちゃんのお兄ちゃんになってやる！」

「いや親権とかホイホイ渡せるもんじゃ無いからな。渡せてもお前が兄になれるわけじゃないし」

「知ったもんかよ。なんせ僕は世界中の妹のお兄ちゃんだぜ？」

「何だお前。アレか？ 自分を兄だと思いきむ精神異常者か？」

「え？ 精神は至って平常だけど」

「こりゃ末期だ」

知ってたけどな。御厨が妹キチってのは一年も一緒にいれば嫌でも分かってしまう話だ。顔は悪くないのに、だから彼女出来ないんだよお前。

「優愛菜ちゃんどうするつもりなんだよ。明らかに落ち込んでたぞ？」

「どうするって……別に何も無いが。強いて言うなら、遊璃に頼んだ」

「人任せとかお前なあ……水無ちゃんはお前の彼女なんだろう？ 彼女に自分の妹のメンタルケアを頼むのが普通じゃないことくらい、彼女いたことない僕だって分かるよ」

そんなの俺だって分かってる。だが、俺は優愛菜が泣いた理由を知らない。何より頭脳明晰で頼れる幼馴染の遊璃が「任せなさい」と言ってきたのだ、信じない理由は無いだろう？

——とか考えて、反吐が出そうになる。小綺麗な言い訳を連綿と並べる自分に嫌気が差している自分もなるほど、心の片隅に存在しているらしい。

だって俺の妹だ。たった一人の兄妹だ。グレてしまった理由なんて露ほども分からない、拒絶してくる優愛菜に恐怖心や苛立ちだって多少ある。だがそれで俺が手を伸ばさなかったら誰が手を伸ばす？ 親父もお袋も多忙な社会人だ。優愛菜の友人だって所詮は他人だ。一番接する時間の長い兄が支えなくてはどうするんだ。

「妹ってのはな静流、性別が違うから近くて遠い存在に見えるかもしれないけど、やっぱり近いんだよ。仮に義理だろうが何だろうが家族という集団に属してる時点で肉親な

んだよ」

「……そうだな。その通りかもしれない。御厨の言う通りだ。優愛菜と話さない問題は進まないよな」

「そうだよ。つたく、何やってんだか」

やれやれと肩をすくめて御厨は息をついた。

「それでだ元親友、話を戻そう。水無ちゃんとデキたつてどういう事だ？」

「……………まあ、そういうことだ」

「殺すぞ」

「待て待て。合意の上だから良いだろ別に」

「酷たらしく殺すぞ」

ボールペンを持ち出して、切っ先をこちらに向けてきた御厨の腕を抑えながら俺は溜息をついた。ここんとこ溜息ばっかだ、全人類の中で地球温暖化貢献率ランキングなんてあつた日には桂川静流の名前は上位に食い込んでいることだろう。

適当に親友と会話を交わしながら、俺の思考は空回り続ける。

俺はこれから一週間、水無遊璃の彼女として高校でも生活せにやならないみたいで、それが酷く俺の心を冷たくした。クラスの中核人物が「おーい！ こいつこんな気持ち悪い本読んでたぞー！」と友人の読んでたライトノベルを颯爽と取って晒し上げた時の

友人の気持ちだ。これは友人の話であつて、決して俺の話ではない。今はラノベとか読んでないしな。だからお前なんだろう？　みたいなツツコミは心の中で留めてほしい。

言うまでもないが、遊璃のことは嫌いではないし嫌いなら大気圏外まで遠ざけていい。容姿は良し、性格も備考はあるがまあ良し、それでいて頭も回る幼馴染ながら完璧な女子高生だ。駅で待ち合わせしてるだけでもスカウトマンに声を掛けられるらしく、大学生になつたらミスコンとか出た脚光を浴びちゃうんだろうなあとか人知れず考えたりするくらい無欠だ。完璧だ。十全十美だ。ルサンチマンがあるならともかく、基本嫌う人間などいないだろう。

だから、だ。

こんなことになるなら偽りの恋人になるという提案なんて断れば良かった。

今この時点において、完全無欠だった水無遊璃はたった一つの欠点を持つてしまった。桂川静流という、彼氏の存在だ。世界が狂つても、天変地異が起きても、桂川静流は普通の男子高校生である。何かに秀でてるとか他に無い意外性を有してるだとか、そんな事は一切無い。公立小学校、公立中学校と普通に進み、高校受験はせざるを得ないから仕方なく遊璃と同じ高校を志望して進学しただけの中身の無い高校生だ。

と、これだけだと勘違いされるだろうから注釈として一応付け加えておこう。これは自虐ではなく事実を加味した評価であつて、決して自分を蔑ろにしている訳ではない。

生憎と普通の学生なりに真つ当な精神を持つてゐるから、自罰的な厭世主義者とかじやないのだ俺は。その辺を間違えられると困る。

だからまあ、簡単に言つてしまふと桂川静流はありふれた若者の一人ということだ。不釣り合いなのだ。俺と遊璃は。

友人としてなら何一つ問題無い。でも恋人だ。青梅やまと青海うみくらい違う。とは言え、まだ大丈夫だろう。身内話だけで終わるのなら良いきさ。俺だつてそこまで気に留めないし、何事も無いいつもの高校生活が続くだけ。

だが漏出してしまえばそんな呑気なことは言つてられない。他からすれば、俺と遊璃が付き合うのは平民が王族と婚約するようなもの、とか例えを挙げてみるが我ながらしっくり来ない。欠伸が出るほどセンス無い俺。国語赤点スレスレは伊達じやないのだろう。だがしかし意味合い的には言いたい事は遠からず。

朝のHRの始まる予鈴を聞きながら、更なる波乱の予感に頭痛がした。

## 三角形上のストラグル

ゴツんと、重い衝撃が頬を走った。俺の身体はその余波を受け切れずに地面へと倒れ掛く、すんでのところで踏みとどまる。だが空いた腹に拳が刺さり、なす術も無く俺は倒れ込む。

「あのな？ 分かるだろ桂川。お前にや、水無は似合わないんだよ」

見下しながら、今にも痰でも吐いてきそうな表情で俺に言う。やれやれ、何も俺はしてないというのに。俺をサンドバックにする体力があるなら本職バレーボールの練習でもするか、それか女子バレー部に謝罪でもしてりやまだ社会の役に立つだろうに。

昼休みはまだ半分、ダウンする俺はまた道端の石ころみたく蹴られることだろう。こんなんなら昨日だけでも筋トレしとくんだったな。痛いのは苦手なんだが、仕方がない。

男子バレーボール部部員である葉加内源内はかないげんないの暴行に、被害者である俺は憤慨するでも慄くでもなく。どうしようもなく無関心だった。

どうでもいいが  
閑話休題。

事の始まりは昼休みに入った直後のことである。

昼飯を食べようと俺は弁当箱の蓋を開けて、それから教室にクラスメイトではない知らない奴が入ってきたことに気付いた。

いつもなら特段気にすることでもない。森の中に木が生えるくらい日常的な光景で、友人に会いに来たとかそんな理由で他クラスの人間が入ってくることは多い。

だが今日、この瞬間に入ってきた男に關しては違う。剣呑とした雰囲気は何より鋭い眼光、明らかに磯野を草野球に誘いに来たとかそんな平和な目的ではなさそうだった。

そして彼は言ったのだ。

「桂川はいるか?」

……は? 誰だよお前。

残念ながら、俺の乏しい記憶力だとその髪をオールバックにした、以下にもガラの悪そうな高校生に心当たりはない。

問われたクラスメイトの一人が俺のいる方向を指差した。あのな、人を指差すとか本当に道徳履修したの? 心のノートちゃんとやった? 心のノートに「危ない人物が来た場合は桂川静流に押し付けるのが道徳的に正しい」とか一言でも書いてあったか?

その男はギロリと、さながらこれから殺すターゲットを見定めるように俺に視線を寄

越すとズンズンと不敵に歩んでくる。

「お前が桂川静流か？」

「桂川静流？ はて、俺はウィリアム・バートリー。南アフリカからの留学生だ」

「お前のどこが南アフリカ人だ。くだらねえ嘘吐いてる暇あるなら付いてこい、話がある」

冗談が通じないとは相当人生損してるな。それはもうダイヤモンド並みに硬い脳みそなのだろう。哀れなり。

とまあ、そんな感じで校舎裏まで連れてかれて蹴られ殴られるのが今の俺。情けない？ 確かに、端から見たら虐められっ子極まってるだろう。

昼下がりの校舎裏は不良の溜まり場の鉄板と言うべきか、人っ子一人おらず立っているのは俺と庭加だけだ。正確に言うなれば俺は尻もち付いて倒れてるわけだが。にしても、一応県内ならそこそこの進学校でも不良っているんだな。また知識が広まったわ。

敵つい相貌で葉加内は路面に唾を吐き捨てた。

「俺は別れろつつつてんだよ。じゃなきや未だ殴られるか？」

「葉加内。そういうのは水無に言え、どうせアレだろ？ 水無のことが好きなんだろ？」

なら俺なんか殴つてないでさきつと聞いて告つてくれ、俺の怪我が増える」

「誰に向かつて言つてんだ。状況を見ろよゴミ。俺が上、お前が下。上か下の言うことを聞く道理、あるか？」

頬に葉加内の拳が押し付けられる。ヤダ理不尽。お前はどこのメソポタミアの王様だよ。

もしかして男子バレー部はみんなこうなのか？　こういう感じなのか？　ガラも悪いし覗きもするし、救いようがないだろもうこれ。もう廃部になれ廃部に。

「なあ葉加内。そもそもお前、俺が水無に別れろと言つたらどうなるか解つてて言つてんのか？」

「はあ？　どういう意味だ」

猜疑心マシマシの声を上げて葉加内は拳を引つ込める。

「仮に俺が遊璃に別れ話を持ち掛けるだろ？　そうすると絶対に遊璃は理由を聞いてくる。その時に「葉加内源内に別れろと言われたから」とか伝えたらお前の印象がどうなるかなんて自明の理だぞ」

「……一理あるな。でもお前が嘘を吐けば良いだけの話だ。吐かなかつたら殺す」

指をポキポキと鳴らしつつ、シャブ度顔負けで「ああん？」とかガンをつけてくる葉加内に俺は溜息をついた。

「分かってないな葉加内。お前に対する遊璃の印象を決定付ける権力を持つてるのは俺だ。後から殴ろうが今殴ろうが、俺が真実を話せば全て事も無し。嘘つくメリットも無いしな」

「……何だよそれ。んだよクソ！」

そう言つて葉加内は地面を蹴り飛ばす、砂埃が舞つて非常に煙いので辞めてほしいんだが。

尻に付いた砂やら何やらを叩いて立ち上がると、イライラした様子の葉加内が舌打ちをしてくる。

「そもそもお前、何で俺の方に直談判しに来たんだ？ 遊璃に直に言えばいいだろ、同じバレー部なんだし」

「アホか！ んなこと出来るか！ 覗きをやらかした集団にいる男ができる訳ねえだろ！」

それもそうだ。遊璃もその事についてはそれはもう静かに噴火していたのだから、葉加内が会いに行ったところで「で？ 何で来たの？」とRPGゲームの村人みたいな台詞を百回は繰り返すだろう。

「もう一発食らいたくなかったら教えろ！ 俺はどうすれば良い！」

「知るか！ 自分で考えろそんなの！」

殴られてた相手に教えを請われるとか長い人生でも初めてだぞ。素直か。意味が分からん。もう即急にクラスに帰れ、つか遊璃に告れ。俺は知らん。

そう叫び倒してやりたいのは山々だったが、そんな事をすれば桜島よりも噴火頻度の高そうなこの男の琴線はまたもや弾けに決まっている。俺だつて無為に殴られる趣味は生憎持ち合わせちゃいない。

「分かったよ。じゃあ俺が遊璃にお前の印象を聞いてやろう、それで良いだろ？」

「……チツ」

それ、肯定の舌打ちなの？

仕方ないので俺はスマホをポケットから取り出して電話アイコンをタップする。慌てて「お前今ここで聞くつもりか!」と葉加内が言ってくるが知ったことか、何で俺が知らん暴漢のために未来の時間を割く必要があるんだ。悪いが俺の未来の時間はもう妹に予約してある。

無言の空間に虚しい電話音が響く。5コールした後には遊璃は出た。

『静流どうしたのよ』

「葉加内源内つて知ってるか？」

『え？ 突然何よ』

「あんまり気にせず、思ったことをそのまま言ってくれと助かる」

本当に助かる、暴力的な意味で。

遊璃は言葉に詰まる、というよりかは思い出すように呆けた声がスマホから流れる。その間に俺は電話をスピーカーモードにした。

そうね、と遊璃は思考を打ち切るように呟くと、ガトリング砲みたく口火を切った。

『知らないわ。誰？ 新種の昆虫の名前か何か？ 名は身体を表すと言うけど、触れれば崩れそうな名字ね。葉加内、儂い？ それとも墓が無いのかしら可哀想に、まあ別にそんな事はどうだって良いわ。重要なのはこの私とその名前を一切認知していないということよ』

「分かった分かった、一切の憂慮も無く100%丸つと分かりましたよ。俺が悪かった」  
『あんたは別に悪くないわよ。じゃ、そういうことだから』

ピッ。という無慈悲な断線音。

そこから葉加内が崩れ落ちるのにさほど時間は要さなかったと付け加えておこう。

一日の授業を無為に流し、特筆するようなやり取りも無く家に帰った。

6月の日差しと蔓延する湿気に体力が奪われつつ、使って十年目の家の鍵を錠前に差し込む。確かな感覚と共に今日も機能していたらしい我が家唯一のセキュリティになんら感想もなく玄関ドアを開けば、妹がいた。

「お前さ。話があるんだけど」

玄関の土手のすぐ手前、年数を経ても度重なる掃除の成果として今日も清潔感のあるフローリングの上で何故か妹は体育座りをしていた。その様はさながら座敷童子。いつの間に妖怪変化したのだ妹よ。

優愛奈の服装はまだ制服で、ブレザーだけ脱いでYシャツにスカートという出で立ちだ。ついでにパンツまで見えてしまっているが、そこはコイツの兄としてプライバシーの観点から語るべくもないだろう。ソメイヨシノを連想させる淡いピンクだ。

「丁度いい、俺も優愛奈に話があったからな」

様子を伺いなら俺は靴を雑に脱ぐ。昨日は喧嘩別れのような形になってしまった訳だが、今の優愛奈は幾分か冷静さがあるように思える。

藍色の双眸が俺の頬を捉えた。

「そう……頬腫れてない？ 喧嘩でもした？」

「気にすんな。青春の証だ」

あく、と咄嗟に濁しながら放った言葉は何か違う気がした。冷えた脳味噌で思案すればこの殴打痕、やっぱり恐喝の証とでも云った方が正確で、でも妹に温良優順とイチから話すのは少し面倒臭い。何せ遊璃のことを話さなきゃならないから、昨日のことを思い出してまた荒れてもおかしくない。

「珍しい。そういうのガラじゃないじゃんお前」

「勘違いすんな、不可抗力だぞ。俺は巻き込まれたんだ」

「どうだか。そういうのに昔から鈍感だし。手当しよか？」

「鈍感じゃねえよ。頼むわ」

立ち上がると、癖なのかスカートに付いた砂を払うみたいにパンパンと手で叩く。ここ、室内なんですけどね……。

リビングに移動すると俺はソファアに座って、優愛奈は戸棚から絆創膏やら消毒液やら胃薬が詰まった医療ボックスを取り出してガーゼに消毒液を染み込ませた。準備終えると「これでいっつか」とひとりでに領き、そのまま俺の頬に当てる。最初はそっと、患部に優しく当てるような力加減。だったのだが何故か徐々にグリグリと力を込め始めて痛覚が神経を介して危険サインを高々と発し始める。マジで痛い。俺、なんか恨みでもあるのか？

「妹よ。痛いんだが」

「うるさい。圧迫止血だからこれ。男なら我慢して」

「圧迫止血つてもう血流れてないんだが……」

苦情の声を上げてみるが、サッカーボールと間違えて地球でも蹴つ飛ばしたみたいに妹の反応は芳しくなかった。

巫山戯た事を宣いつつも真正面に見える優愛奈の顔は至極真剣なもので、多分俺はこんな表情は久しく見てない。ここまで近くで見詰めるのも久々のことだ。スツピンにも関わらずシミやニキビ一つ無い結晶化したミョウバンのように透き通った白い肌、整ったプロボーシヨン。見れば見るほど自分の妹はこんなにも可愛いんだと自慢したくなる。遊璃とか、ついでに御厨とか。やっぱ御厨はやめておこう、アイツは妹の話をした瞬間発狂する。

「はい、これで問題無い」

絆創膏を貼って、ピンと軽く弾いて優愛奈の細く伸びた指が離れる。高尚な芸術品みたいな人差し指に、これを吸ったらどんな反応をするのだろうか？ と脳裏で純然たる疑問が過ぎ去ったが、それをしてしまったら一生会話をしてくれない気がした俺は静かに衝動的な欲求を呑み込む。変態的な思考回路だが俺は変態ではなく紳士である。マジの方の紳士である。しかし如何に俺ほどの紳士といえど滾る妄想に手は付けられない

いのだ。

処置が終わって、やってきたのは空白の無言。鼻孔を燻るフレグランスな匂い。いつから香水なんて付け始めたんだろうか？ きつと最近だ、それまでは無味無臭の、敢えて言及するならば優愛奈の肉体から滴った汗の匂いしかしなかった……本当に俺、紳士なんだよな？ 自分でも自身が無くなってきたが。一応、妹を一人の女として見てはなから大丈夫だと思うが……。こんな心配をしなきゃならない自分に嗚呼、本当に凹んだ。

口を固く結び、何か、現状を変化させるような致命的な言おうとしているのか、妹の顔は硬い。茶化そうと口を開いた俺が再び閉じざるを得ないレベルだった。

きつと今この場で俺が何を言っても、蛇足な雑音と化して虚空に飲み込まれるだろう。兄妹だから分かる、否。兄妹にしか分からない、そんな決定的な確信だ。

無言でいるとヤケに五感が敏感になる。優愛奈がリビングで飲んでいたのか、ティーパックをお湯に潜らせた1個14円くらいのホットレモンティーが離れた場所から香ってきて香水と混ざり合う。車が家の前を走る音、鳥がカアカアと夕方の調べを奏で上げ、室内からは互いの呼吸の音だけが微かに響く。

三点リーダーが10個は並ぶくらいに十分な間隔を開けて、優愛奈は少しカサついた唇を戦慄かせた。

「私、さ。実は嘘を付いてたの。お前のことも、自分の事も。真っ直ぐ目を向けずに欺瞞で塗り潰して、目前に嘘で出来た強大な壁を作り上げてた」

自嘲するように言う優愛奈に、俺はひと呼吸置いた。冷静になるためだ。

追い詰められていたのは知っていた。何故なら無自覚とは言え、俺が優愛奈の精神を歪めてしまったからに他ならないからだ。

とは言え、今更だが俺は妹に嘘を吐きたくはない。

だから突いて出たのは優愛奈の言葉を否定するものだった。

「…………それは悪いことなのか？」

「え？」

「俺は思うんだが、現実から視線を反らすのは悪いことじゃないはずだ。現実だって全てが真実とは限らない。嘘も虚構も誇張も、現実を織り成した一部分だ。見たくないものは見なくなつて良い、それは人間に許された権利なんだよ。大丈夫だ、本当に目を向けないやならない現実が俺が代わりに見てやる」

「……………………それじゃ、駄目。駄目なんだよ、お兄ちゃん」

駄目なはずが無いだろ…………！

そういう強い気持ちが強くて燃えて、優愛奈を見返すと、秋風でも吹いたかのように灯った想いは揺らいだ。意地でも引かない、そんな意志が滲み出た瞳孔。怯んだと言

われたって良い、俺は知っている。以前からこうなった優愛奈は絶対に自分の意見を變えない。

「もうさ、良い加減変えなきゃならないの。この関係も、環境も、全部。全部全部全部全部！ このままなんて私は嫌だよ！」

「……安易に変化を求めても、崖から落ちて泥濘に嵌るだけだぞ」

「分かつてる！ けど私は欲しいの！ 私は、私が考えた自分の理想が欲しい！ ねえ、お兄ちゃん。それっていけないことなのかな？ 手が届きそうに届かない、何万光年先の明星と分かつてても目が反らせないの！」

優愛奈は胸を上下させて、声を荒げる。

掛ける言葉が無かった。いや、無かった、というのは正確には違う。俺が何かを言つてそれで円満にこれまでの事もこれからのもも解決出来る、なんて幻想が抱けなかった。俺はコイツの兄貴なのに抱けなかったのだ。

兄貴は妹より早く生まれただけで、先立ちとしてその不安は最大限なくしてやらなくてはならない。とか心意気を得意気に語っていたのは親父だが、俺もまあその慈善活動に5ミリくらいは理解を示さない訳でも無い。親父自身はどうせ俺より優愛奈可愛さで言い放つたんだろうが、それでも俺も妹は可愛いと思つてる。嗜好的には姉の方が好みとはいえ妹だつてまあ可愛いものだ。お前呼びされたりぞんざいに扱われても心が痛

いだけで生傷が増える訳じゃないからな。やっぱちよつと辛いかも。

だから妹の力になりたいという俺の自由意志はダイヤモンド並みとは言わずとも、厚さ一メートルの鉄板くらいは見事にあるもので、しかし今回は言わなきや悪化すると分かりつつ何も言えなかった。言ったら悪化する、そんな確信が脊髄反射で全身を巡ったからだ。

考えに考え倦ね、俺の口からはついぞ答えは出ず。代わりに優愛奈の薄いピンクの上唇が持ち上がった。

「ねえ、お兄ちゃん。お前とか言うの、もう辞める。辞めるからさ——一緒に一生の恋をしよう」

へっ？

まあ随分と間拔けな声が出たもんだ、と脳内のもう一人の俺が冷静に自己分析すると共に心に熱が灯った。

待てよ、待て。待ってくれ優愛奈。

何だ、それは。昨日は、もしかして優愛奈は遊璃の事を好きなんじゃないか……？、とか勘繰った訳で、だから俺がネコみたく奪い取ったと思つてあんな癩癩が起きてしまつたと考えたが。それは反対なのか？ 俺が盗られたと思つて、あんな激情を見せたのか？

核弾頭ばりに落とされた衝撃告白は俺の思考を阻害する。何万頭もの像に直接内臓を踏み潰されているような、圧迫感。何も理解が進まない。

「ねえお兄ちゃん、私さ。今日だから全部隠したことも思いも全部言っちゃうけど、本当に自分の気持ちに気付いたのは大体一ヶ月前なの。お兄ちゃんが遊璃さんと仲良さげにファミレスで勉強してるのを見て、凄いモヤモヤしたの。それこそ積乱雲みたいに感情が渦巻いた、自分が兄妹として好きなのか異性として好きなのかって。それでさ、改めて自分があそこに、お兄ちゃんの隣に居ない事に深い不満を覚えたの。で、気付いたの。お兄ちゃんが好きだって。異性として好きだって」

ほんのり赤く上気した頬に、熱の籠もった視線を感じながら曖昧に返事をする。優愛奈は全く気にせず続けた。

「でも私とお兄ちゃんは兄妹。法律も倫理観もこの想いは許してくれないじゃん。だからキツく紐を結んで自分の想いを縛ったの。態度も変えて、あまり関わらないよう接触も避けて、それまでの呼び方だって取り繕って」

でも、ホントは最初から失敗すると知ってたんだ、と優愛奈は少し悲しげな声で言う。「だって忘れられなかった。この想いも、お兄ちゃんの事も。他の些事と十把一絡げにしてゴミ箱に捨てるなんて、とても出来なかったの。知ってる？ 恋愛ってね、相手に会えないほど想いは増幅するの。相手が遠大であるほど理想は理想で有り続けるの。」

だからその分を補完するために自分を慰めたって、脳裏ではお兄ちゃんを思いながらだったから何も意味は無かった。土台諦めるとか忘れるとか、もう不可能だったんだよ……。病魔に侵されたのと一緒に、治る見込みなんて無かった」

——だからね、好き。血縁とか知らない。遊璃さんも関係ない。略奪でも良い。欲しいの、お兄ちゃんが。

そう言う優愛奈に俺はどうすれば良いか分からず、ただ無意味に思考だけが空転し始める。

今更遊璃との関係が嘘だと告白しても無駄だろう。もう優愛奈は決意してしまっている。最早こんなの、見たことの無い優愛奈だ。多分もう現代社会からハブられ批判される覚悟すらも決まっている、そんな重みすらある。

俺はどうすれば良いのだろう。そんな疑問ばかりが追って回る。

だって相手は血縁関係のある、親父もお袋も俺と同じ妹だ。幼い頃から面倒も見たし、恥ずかしいところも見られたし、寝食共にしてきた妹だ。両親よりも長い時間を過ごしたと言つて過言では無い、妹だ。

確かに妹は兄貴として見てもきつとその学年では一番を争えるくらいは可愛い。そこまでアウトドアじゃないから身体は全体的に白くて、顔立ちも少し幼さが残ってるがそこがまた大人ではない美少女感で溢れている。男子なら否が応でも興味を惹かれて

しまう胸だつて中3にしてそこそこある。だからか中学時代なんて「ちよつとこの手紙妹さんに渡してください！」と俺経由でラブレターが来る始末だった。俺に頼る軟弱者の手紙は全部破つたが。

ともかく、何だかんだ言つても家族というジャンルにしか分けられない。異性として見たことが無い——とか言つたら嘘になるかもしれないが、それでも他人でも友達でも増してや恋人でも無い。家族なのだ、優愛奈は。

だがしかし。俺は正直にそう伝えようとして、舌が動かない。口も開かなかつた。

それは未だ愕然と驚嘆している、なんてアホみたいな理由じゃない。単純に、それで良いのかと思つてしまう訳だ。

一世一代の大告白を優愛奈主観で彼女のいる兄貴にして、断られたら優愛奈はどうするだろうか？ 彼女がいるから仕方ないと思うだろうか？ 多分思うだろう、根は優しい優愛奈の事だ。納得はすると思う。あくまで納得だけだ。納得と理解は別物である。

優愛奈の潤んだ瞳に浮かぶ気迫は、俺の目からすると命すら掛けてるようにも視えた。断られたら身投げでもしそうなほど儂く、なのに意志だけが前に出てしまつていく。辛いだろう、そんな二律背反の感情を抱くのは。怖かつただろう、実の兄貴に告白するのは。

どつちとも答えは付かない。示せる回答なんて初めから俺には掃除機で掛けたあと

のフローリングに残ったチリほど残っていないかった。

「……………少し、考える時間をくれ」

我ながらゴミクズみたいな発言だ。

にも関わらず優愛奈は気にしない風に「……………3日。それまでに結論、出して。あんまり遅いと……………私も何するか分からないから」と指先で絆創膏の貼られた俺の頬をなぞりながら告げた。

## 四角形のコンフェッション

自然と途絶えた会話を好機と見て「じゃあ着替えるから」と俺は部屋に戻ってベッドに倒れ込んだ。全身が柔らかに包まれる感覚に、何時もならば眠気が襲来してくるはずなのに今日は自主休業しているのか全く訪れない。それもこれも優愛奈があんな事と言ってきたせいだろう。告られたの何か普通に人生で初めてだぞ、それが実の妹だって？ 本当に笑えないジョークだ、冗談ならどれだけ良かっただろうか。

長く深い息が漏れる。どうするべきかなんて恋愛経験もマトモに持ち合わせていない俺には分からない。誰かに相談しようとも、相手は妹だ。こんなレアケースを経験した全国の兄貴など滅多にいないだろう、寧ろいたら俺と友達になっしてくれ。2時間前の俺ならともかく、今の俺なら存分に仲良くなれる自信がある。

答えだけは早々に決まっている。NOだ。断るしかない。年齢性格趣味身長、そんな他の事は無視出来ても唯一完全無欠に家族であるという事実だけはどんな詭弁や欺瞞で取り繕っても無視できない程に重い。それでも悶々と悩んでいるのは俺が優柔不断だからとかじゃなく、単純に今否定したら何処か遠くに飛び出してしまいたいそう、そんな危うさが優愛奈にはあったからだ。

悩むのは簡単だ。足を止めるのも簡単だ。だが優愛奈は前へと進むことを決めてしまった。前方が例え壁でも崖でも奈落でも、厭わず前へと足を早めてしまった。ああ、ならば年長たる俺も甘えていてはいけない。俺もまた万物流転に則って、この軋みながら回る歯車に乗らなくてはならないだろう。そう、目指すはハッピーエンドで、その為に変化を経験していかなくてはならない。

なら俺は何をすべきか。

……まあ、まずは遊璃に電話してから考えようと思う。呆れるほど俺は変わらないな、今更だが。

事情を話せば、冷徹に遊璃は「はあ……予想外だわ。分かったわよ、ファミレスに来なさい。そこで今後の方針を話しましょ」とか、一介の男子高校生でしかない俺の薄い財布が更にダイエットしてしまうような事をまた提案してきたので「いやいや、電話で

良いだろ。俺の財布を殺す気か？」と返せば無遠慮に「じゃ、そゆことだから。以上！」と強引にプツリと切られた。本当に分かつてるんだらうか？ そろそろあのファミレスに何万課金してるのか考えるだけでゾツとしてくるんだが。少なくともソシヤゲのガチャ天井2回分くらいは使ってる。この金でもっと他に遊びに行けたらうに……とか思ってしまうのも致し方ないことだと俺は思う。

既に勝手知つたるファミレスに入れば、珍しいことに未だ店内には遊璃は来てないようだった。一先ずは店員にもう一人来る旨だけ伝えて壁際の四人席に座る。外から見ても俺の席が分かりやすいように窓際に座つても良かったが、如何せん日光が差し込んでいて身体が蒸し暑くなるのが想像に易かったので日影に逃げる。何せもう5月も下旬、日増しに気温もエスカレートする頃合いだったりする。

それから5分ほどして遊璃は制服のまま現れた。

ズカズカやって来ると開口一番、

「なに陰気な顔して陰気な席に座ってんのかしら。ゾンビかと思つたわ」

とか大変失礼なことを宣つて来やがる。俺のことを罵るのはいいがこの四人席を罵るのは道理が違うだろ。日光から肌を守ってくれる人間に優しい奴なんだからな。

「てかゾンビって何だよ。もっと良い喻えを出せ、一応お前の恋人だぞ俺は」

「確かに恋人がゾンビは私も嫌ね。そういう映画もあつたけど」

「どんな映画だよ。動く死人と恋愛とかニツチ過ぎないか?」

「どちらかと言えば恋人になつても愛してゐたいなテーマだった気がするわ。私には無理ね。生者は生者、死体は死体。例えば鶏肉だつて鶏の死体よ? 愛情持つて飼つていたとしても死んじやつたら食べるしかないじゃない。変わらず死体に愛情を注ぐ人がいたらもう引くわ、ドン引きよ」

「そうか。因みに俺は今飼つていた鳥を死んだら食うしかないと言ひ放つお前にドン引きしてる」

ペットくらい普通に埋葬してやれよ……。

呆れながらメニュー表を手繰り寄せる。そろそろ冗談じゃなく俺の財布がヤバイ……。値段的に、もう世間的も諦めてドリンクバーのみで良いか。

「遊璃、決まつたか?」

同じくメニュー表を眺めていた遊璃がコクリと頷いたので呼び出しボタンを押した。それから俺はドリンクバーを、遊璃はドリンクバーとショートケーキを注文するとジュースを汲みに行くために示し合つたように席を立つ。

「今日もショートケーキ頼んだのか」

俺はザクザクとコップに氷を入れながら不意に気になつて言つた。遊璃はスンと鼻を鳴らすと機械にマグカップをセットしてアメリカンコーヒーの出るボタンを押す。

「気分よ気分。私の恋人のくせに分からないの？」

「分かるか。そもそも偽物の関係じゃねえか」

「つれないわく。全く、これだからモテないのよアンタは。まあ妹とはそうでもないよ  
うだけど」

「ほつといてくれ。今その事で悩んでるんだっつーの、そこんところはあんまほじくんな」  
泡が立たないように限界までコーラを入れて、湯気の立つコーヒーを持つ遊璃と並んで席に戻る。

そう言えば、俺と遊璃の関係はどうなっているのだろうか？

始まりは俺が優愛奈の真意を知りたいと言つて、じゃあ付き合う？ と相成つたこの  
関係性。元から付き合いのある幼馴染ということもあつて、意識せずともそれっぽい雰  
囲気を出すのは簡単だった。身も蓋もないが、俺もまあ満更でもないと思つていたのも  
事実で。

しかしまあ、状況は一変した訳だ。優愛奈は俺が嫌いになつたとか邪険に思つてた  
かでは決してなく、むしろその正反対。まさかあそこまで好意があつたとは思つても  
なかつた。多分遊璃も気付いてなかつたに違いない。

思うような結果ではなかつたにせよ、目的も果たした訳だからこの偽りのカップル  
ごっこも早々に幕を閉じるのが道理だろう。デートとか今更やる必要もないわけだ。

今の覚醒した優愛奈は略奪愛上等とばかりに告つてくるほど意思が強いから最早俺達の関係など考慮に入れないはずだ。

「ねえ、関係ないんだけどーっ私も言いたいことがあったんだけど」

ホットコーヒーに口を付けて、今思い出したかのように遊璃は口を開いた。

本当にどうでも良いことなんだろうなあ、と半目で「はいはいどうぞ」と促す。もしも今から5秒前の俺に一言告げることが出来るならば、今口に含んだコーラを即座に飲み込んで口の中を空にしろと言いたい。忘れるな桂川静流、目の前にいる女は破天荒を極めた女だぞ、と。

まあそんな覚悟を突如できるかと言えば無理な話で、ストローで吸いつつコーラを含んだまま聞いてしまう。

「私、実は優愛奈の事を恋愛対象として好きなの」

「……はあ!? げふっげふっ」

「うわ汚っ! 自分で拭きなさいよね」

突然の告白に炭酸が変なところに入って蒸せた。しかも吹き出してテーブルを汚してしまい、店員に嫌そうな顔で見られる。何これ、俺が悪いの? ちよつとは情状酌量の余地あつても良くないか?

「ほら、紙ふきん」

「サンキュ……なあ。今の本気か？」

「ええ、当然よ？ 私は嘘はつかないわ」

無残に溢したコーラを拭き終えて、紙ふきを脇へと置く。

はいダウト。偽りの恋人作戦の考案者がのうのうと言ってやがる。

とか全力で否定したい気持ちとはとてもとてもあつたが、真面目ぶって話す遊璃から嘘の匂いがしないので心にしまい込む。

「つまり……、その、なんだ？ お前、恋愛対象が」

「違うわ。私はノーマルよ」

「……はあ？」

「私はノーマルよ」

いや繰り返されても、なあ？

幼馴染というのものもあるし、あまりこういうのはいにくいだが、社会的に考えたらレズビアンというやつなんじゃないのか？ 全然気付かなかつた、素振りすら感じなかつたまでである。

ただ、何となく心にポカリと空いた穴に風が吹き込んだような冷え込みを感じたが、それより。

「……その、優愛奈のことが好きなんだろ？ じゃあレズだろ」

「違うわ。優愛奈が同性なのに可愛いのが悪いのよ」

「俺の可愛い妹に責任押し付けんな」

「何よ。別に全然良いじゃない。それくらい同性からしても優愛奈は可憐で魅力的で結婚したいってだけよ」

「全然で済む話じゃないんだが……」

特に後半な。結婚とかお前、自分の年齢考えてから物を言ってくれ。優愛奈なんかまだ14歳だし、結婚以前に普通の恋愛すらまだだろう。だろうってか、その恋愛対象が俺な訳だが……。

ブルーになりつつコーラを口に含む。そこはかとなく化学的な香料が舌に触る。

「はあ……何だってこう次から次に問題が出てくるんだ」

「黄昏れてもしようがないわよ？ 次行きましょ次」

「全国お前が言うな大賞案件なんだがそれ」

「私は違うわよ。優愛奈のことは3年前くらいから好きだったし」

だからそうやってポイポイと爆弾を放り込んでこないでくれませんか？ 手榴弾でお手玉でもしてんの？ 投げ誤ったやつがコッチで誤爆してるからな？

「まあ一旦私のことは一旦置いておきましょう」

「お前が持ち出したんだろ……」

思わずボヤいてしまうが、何も反省の色を見せずそれどころか「良いじゃない別に。それより優愛奈のことでしょ」と開き直る始末。気張れよ優愛奈、お前のことを好きらしいこの幼馴染は手強いぞ。

「それで優愛奈が静流に告白したのは本当なの？」

「……まあな。今さっきのことだ」

「で、アンタはそれにどう思う訳？」

「どうもこうも、付き合えるはずが無いだろ。俺は兄貴でアイツは妹、生涯永劫にそれだけだ。異性としてなんて、今更見れるか」

「アンタらしいわね」

遊璃は納得げにコーヒーを啜った。その表情は、不思議と平時のと同じに思えた。

「つまり断るってことよね」

「まあ、せざるを得ないだろうな」

「でも優愛奈がどういう行動を起こすか分からないわよ？ 話を聞く限りじゃ随分自分の感情を捻じ曲げてまで想いを押し殺してたそうじゃない。それがダムが決壊したみたいに溢れ出てきた現状を考えると、今の優愛奈は情緒不安定と考えると良いわ」

その現状を作り出してしまったのに私も一枚噛んでるんだけどね、と珍しく少ししおらしく言う。

「いやまあ、何だ。何も無いならともかく、優愛奈がそれまでずっと無理をしてた以上、多分俺達は何もせずともいつかはこうなってた。だからあんま気にすんな」

「……なに？　慰めてんの？」

「当人の兄貴が許すつつつてんだ。過去より未来のことを考えようぜ」

「それ加担したアンタが言う台詞でもないわよ。そうね、でも一応礼は言っておくわ。

……ありがとう、それにごめんね」

こそばゆい感情に、無意識に頭をかきむしる。

そういうの本当に勘弁してくれ……。ギャップが凄いだよ、これだから美少女は損をしないし羨ましい。お礼一つでここまで俺の感情を揺さぶってしまうのだから。対男子錯乱兵器として一家に一台欲しいまである。

コーラで気分を整えて、改めて向き直る。

「ああ。んで、どうするかな本当に。お天道様が沈む前に方針を固めたいところなんだが」

「昨日までの方針じゃ駄目でしょうね、間違いなく。……優愛奈と話してみても良いけど、こうなったら私じゃ逆効果かしら」

「分かんが、かもな。偽の恋人なんてやっちゃまった以上、もう今まで通りとは行かないだろ」

と言葉にしてみても、それとなく違和感を覚える。

少し考えて、直ぐにその違和感に正体は脳内で顕現する。遊璃は優愛奈のことが好きなのに、何で俺と偽りのカップルなんてやったんだ？ 一応俺と遊璃と優愛奈は大分昔からの関係で、善意で仲を取り繕うとしたと言われてもそこまで不自然さは無い。

まあ、そんなの今更疑う意味なんて無いか。

「偽の恋人も今日でおしまいってことになるわね。でも私が振られるのは自尊心的に嫌だから今から振ってしまっても宜しくて？」

「いつからお嬢様になったんだよお前。別にどうでも良い、ささつと振ってくれ」

「じゃあ遠慮なく。——シスコンで前からキモいと思ってたのよ、さよなら。あと妹は私に頂戴ね、安心して？ 全権力を用いて幸せにするわ」

「安心できるか！ つか、え？ お前そんなこと思ってたの？」

流石にそれは傷付くんだけど、と遊璃に視線を向けると「ジョークよジョーク。後腐れ無くしておきたいじゃない」とか返ってきた。そういうこと言われる方がよっぽど後に引きずるんだが？

「つたく。本当に大丈夫なんだろうな？ 優愛奈に変なことしないよなお前」

「しないわよ。同意が無きゃ私だって未成年淫行と洒落こむことだって出来やしないの」

「馬鹿じゃねえの？」

「そうだったわね。未成年だと同意があっても駄目だった気がする」

「そうじゃねえよ。人の妹を姓的に垂らし込めようとすんなアホ。しばらくぞ」

それに未成年淫行はあくまで成人に対して適応される罪だからお前に適応される訳でもねえし、それ以前に優愛奈はお前に同意しねえよ。

俺の罵声で頭がおかしくなったのか、何か思いついたように遊璃は机を叩いてコーヒークップがカチャンと鳴った。いや本当に騒がしくてすいません、なので店員さん、その犯罪者の密談を見るような目でコチラを軽蔑しないで下さい。……暫くここには来ないようにするか、うん。

——— 那样的いえば、本当に今となつては那样的いえば程度のものだが。

「なあ遊璃、優愛奈が泣いた理由を知つてたつつてたよな。アレはそういう事で良いのか？」

「ん？ ああ、そのこと。アンタが考えてる通りだと思つてわ。優愛奈はアンタのことが好きだから、私と付き合つて泣いた。流石に私もそれが兄妹愛を超越してるとは思わなかつたけれど……」

「だよなあ。そいや、分かるまで別れてやらない、みたいなことも言つてたよなお前」

「前言撤回に決まつてるでしょ。本人が答えを言つちやうんだもの、そこまで追い詰め

られてたとは私も知らなかったわ」

その点に關しては俺も責任を感じざるを得ない。兄貴として駄目な対応をしてしまったな、クソ。

「あ、でも土曜日に優愛奈を借りるのは変わらないからね。デートしたいし、あつそうだ！優愛奈を私にくれたら全て解決すると思わない！」

ツバを飛ばしながら興奮した面持ちで遊璃は声を大にして言った。頼むから羞恥心を持つてくれ羞恥心。もう店員だけじゃなくて回りからも凄い見られてる。

溜息をつきながら何言つてんのかと考えてみるが、ムカつくほど簡単に答えは出た。つまり、アレだ。優愛奈が遊璃と付き合えば俺は頭を悩ませずに済むし、遊璃は想いを果たせるからWin-Winな結果に終われるという意味だろう。確かにとても合理的に思える。誰も損をしないハッピーな結末というのがあれば、それだろう。

ただ、なあ……。

「だからあげねえつて。優愛奈は俺の物じゃねえし、デートもやるのは良いが俺介さず直接告つてくれ」

「今は嫌よ、絶対断られるじゃない。ゾッコンなんでしょアンタに、勝ち目なんてダブルの的より小さいわよそれ」

ウエイターが持つてきたショートケーキを受け取りながら、去るのを待たずに遊璃は

言葉を重ねた。

何故か俺は最早想いを隠さない天衣無縫な遊璃に、密かに失望を感じ始めていた。いや、失望という言葉が正しいのかは分からない。ただその感情が、仄暗い地底湖の如く幽鬼染みていて、我ながらドロブみたいな心情だと他人語みたいと思う。

この汚い感情を上手く隠せてるだろうか？

少々不安に思いながら、誤魔化すように口を開く。

「まあ勝ち目なんて無いよな。振られて終わるわな」

「凄いムカつくけどまあ良いわ。アンタ、私のことを手伝いなさいな」

「は？」

なんだか物凄い素っ頓狂な声が漏れた。うんうんと一人で頷いてる遊璃にジト目を送る。

手伝いなさいってなんだ？ 優愛奈への恋愛をか？

「アンタ、そのままが良いと思ってるの？ 優愛奈が惚れてることに危惧を抱いてるんでしょ？」

「それはそうだが……」

「ならハッキリしなさいよ。私を手伝うか、そのままズルズル長期戦に持ち込むか。勿論後者はオススメしないわ、その先は暗中模索の泥沼よ」

そう言うとコバルトブルーの双眸で貫いて俺の決断を促してくる。どちにせよ暗中模索なのは限りなくトートロジーな気はするが、今言っても揚げ足取りにしかならない。重要なのは、どちらを是とするかという一点のみだ。

どちらを選んでインモラルなのは変わりがない。兄妹愛ラブコメが同性愛ラブコメになるだけだ。全く、なんでこうなってしまったのかと過去の自分に問い質したい気分である。

何をどうしても沼に足が浸かって身動きに制限が掛かるのは確定事項のようで、最早俺には浅い沼を選ぶしか選択肢は無い。それならば、覚悟は出来ていないが、解は一つしか無い。

「——分かった。納得はしていないが手伝ってやるよ」

「当然ね、アンタならそう選ぶと思ってたわ」

口ではそう言いつつも、満足げに笑った遊璃は少し安心したように思えた。上手く表せないが、それが俺の心を波立たせる。

ともかく、これで俺は幼馴染の恋愛の手伝いをする事になってしまった訳で。さながらギャルゲーの主人公の友人枠にすっぽり嵌ったような立ち位置だ。残念ながら俺にヒロインの好感度を可視化する能力は無いし、特段可愛い女の子の情報通と言うわけでもないのは欠点だが。

ショートケーキを食べ進める遊璃を前に、思いため息を堪える。

青春というのがもし食べ物で、レストランとかで注文できるのならば恐らくこんな味なのだろう。胸が気怠くなるほど苦くて酸っぱくて、なのにほんのり甘い。この甘みがきつとアクセントだ、これが無かったら青春なんてただの不味いイギリス飯にも劣る残飯だ。この味が時代問わず性別問わず人を虜にしてリピートさせるのか。でも、やはり俺には何度自分の心の上澄みを掬い取って並べてみても珍味にしか思えない。

コーラを飲み干して喉を洗う。後味最悪の青春なんて、滅ぶべき文化である。死すべし青春。